

豪州における知的障害者の支援

— スポーツと性教育の視点から —

宮崎 伸一 齋藤 利之
谷口 広明

1. はじめに

知的障害者の支援を考える際に、教育と福祉の連携は重要である¹⁾。近年、知的障害者スポーツ、特に競技性の高い知的障害者スポーツの認知度が少しずつ上がるにつれて、中等教育特別支援校（日本でいえば特別支援学校）から本格的なスポーツ活動をする知的障害児が増えてきており、特別支援学校に在籍中の知的障害児も各競技の日本代表選手となって、海外で試合をするまでになっている²⁾。特別支援学校在学中にナショナルチーム代表となった選手は、その後も障害者雇用促進法による一般企業で就業をしながらスポーツを続けているケースが多い³⁾。しかし、最近のわが国の状況は、海外遠征のための資金調達が困難となり、これは、諸外国にも共通の現象で、特にチームスポーツへの参加国が少なくなっている⁴⁾。このような状況の中で、2019年にグローバルゲームを開催するオーストラリアは常に多くの種目に選手団を派遣しており、何らかの国としての知的障害者スポーツの振興のための施策とその実践があると思われる。オーストラリアの障害者のスポーツ環境については、笹川スポーツ財団による大部の報告書がある⁵⁾。この報告書によれば、オーストラリアでは、スポーツ行政を担うスポーツ統括組織として、1985年、オーストラリア・スポーツコミッション（Australian Sports Commission：ASC）が設立され、1990年～2010年はASC内に障害者スポーツ課（Disability Sport Unit）が設置されて全国で障害者スポーツ普及事業や大学と協力した調査研究活動がとりわけ盛んであったという。また、知的障害者スポーツに関しては、1986年設立のスポーツ・インクルージョン・オーストラリア（Sport Inclusion Australia：SIA）が中心となっているとのことであるが、

わずか10行程度の記載であるため、その役割については十分に知る事ができない。

そこで本研究では、オーストラリアの知的障害者スポーツの実態を、SIAより聞き取りをすることにより知ることを第1の目的とした。第2の目的は、知的障害者の性教育の問題である。これは教育と福祉との連携の観点からは重要な問題であり、特に女性アスリートにとっては月経や第2次性徴の理解と対応、また、計画外の妊娠による選手活動の中断の予防など、とりわけ重要な事柄である。しかし、本邦での知的障害者の性教育の実態についての詳細な報告は、児島らの654校を対象としたアンケートに基づく包括的な報告⁶⁾と、齋藤らの特別支援学校2校を対象とした実態調査⁷⁾以外に見るべきものがない。そのような中で、今回、オーストラリアの性教育を州単位で統括している組織を視察する機会を得たので、オーストラリアでの性教育の現状を合わせて報告する。

2. 調査期間および調査方法

本研究は、2017年8月30から9月4日の日程で、現地オーストラリアで、① Sport Inclusion AustraliaのPresidentおよびCEO、②ビクトリア州の性教育を担当しているFamily Planning Victoriaの所長に非構造化インタビューを実施し、組織の運営方針や現在行っている諸活動などについて情報を収集した。

3. 結 果

3-1 Sport Inclusion Australia (SIA) に関する聞き取り調査

以下、要旨を記載する。なお、同組織のウェブサイト (<https://sportinclusionaustralia.org.au/>) もあり、そこでの記載内容と一部重複のあることをあらかじめお断りしておく。

【活動の目的】 スポーツを通じた知的障害者の社会的インクルージョン

【設立年】 前身であるAUSRAPID (Australian Sport and Recreation Association) は1986年に設立。2015年に現在の名称に変更。

【役割】 国際知的障害者スポーツ連盟 (International Federation for Athletes with Intellectual Impairments: INAS, 以下INASと称する)^{注1)} のオーストラリアを代表する団体。グローバルゲームス^{注2)} の主催 (2019年オーストラリア、ブリスベン大会)。国内各競技団体 (以下national federation: NFと称する) との連携。障害者とNFとの橋渡し。INASのルール改正等

新事項，例えばクラス増設等についてNFに周知する。

【SIAの運営】 4名（President，CEO，資格と財務担当，プロジェクト（SNS，ニューズレター）担当）の専従者と学生パートタイマー1名で運営。それと各州を統括する7組織（member organizations）14名のスタッフがフルタイム雇用されている。

【会員】 会員（知的障害者/児）は，学校レベル，国内レベル，国際レベルの3構成をとっている。会員は年会費を納入する。現在，国内レベル1,700名，学校レベル1,800名で，学校会員はこの1年間で400名と増加が著しい。オーストラリアでは教育の場でのインクルージョンが進められており，通常学級に所属している知的障害児の参加が急増しているため，彼らの学校会員への入会審査（School Sport Classification）の需要が増えているのである。一方，学校在籍中にSIAに入会することで，INASの大会やパラリンピックに自身が出場可能な競技種目やクラスを早くから把握できるために，より競技スポーツに取り組む意欲が湧くなど本人にとってのメリットもある。また，学校は団体競技スポーツをするのに良い環境であるが，この時期に入会することで団体競技に興味を持つ障害児も増えるというオーストラリア国全体から見たメリットもある。

【会員情報の共有化】 各NFはSIAの会員カードにより個々のアスリートのIDを確認し，データベース上での閲覧も可能になっている。

【財源】 政府（実際にはオーストラリア・スポーツコミッション：ASCより），会費，一般からの寄付



図1 SIAとのミーティング（右端はCEOのRobyn Smith氏）

以上がSIAの主な業務内容である。SIA自身が国内大会を主催することはなく、主催するのはNFである。NFは、障害者を対象としたトレーニングから大会の開催までの国内イベントの開催、障害者スポーツの普及、選手育成などのスポーツ関連事業の他に、就労支援、レクリエーション等の企画を行っている。これらは特別支援学校と連携して行われることも多い。すると、SIAが直接障害者と接することはないのか、というと、そうではなく、最近では、海外に在住しているオーストラリア国籍の障害者が、テニスの国際大会へオーストラリア代表としての参加を希望してSIAに連絡してきたので、その障害者と当該NFをつなげた例があるとのことである。このように、ある競技をしたいが、その競技団体が存在するかどうかかわからない、あるいはどこに連絡してよいかわからない場合の橋渡しの役割もしているのである。

3-2 Family Planning Victoria での聞き取り調査

同所の所長による基本理念は以下のものであった。

約40年前に設立された。ここでは性教育を、知的障害者だけではなく、すべての人々が等しく享受するという考えのもとに運営されている。そして、その平等性はセクシュアリティの多様性、民族の多様性を尊重し、先住民族に敬意を払うという考えに広がっている。そこから必然的に性の平等という感情が生まれてくる。性の平等という前提のもとに第2次性徴や、生殖の科学的知識が習得されていく。もちろん、年齢や障害の有無、程度によって教材の内容は異なるものが用意されているが、すべての人は必ず性を理解できる、という考えがある。ここで、使われる教材の一部を見せてもらったが、いずれも「リアル」でわかりやすいものであった。知的障害者による性犯罪はオーストラリアでもやはり起こるのであるが、それは、性交の知識を得たからではなく、いわゆるAVフィルムを無批判に観て、性交はその前提の如何にかかわらず、男女双方にとって良いものであるとの先入観をもってしまうことが大きな理由のひとつであるとのことである。

本機関の特徴として、教育者、医療者向けに豊富な教材が用意されていることと、いわゆるアウトリーチが盛んで、学校での正課や地域教育に職員が出向いていくことが多いことがあげられる。ここには、性に関する相談のためのクリニックも設けられており、医療機関でもある。これらのうちの一部は有償で提供され、Victoriaからの援助と一般からの寄付が財源となっている。

ここには、性に関するほとんどすべてが用意されている、という印象を受けた。この機関の活動の概要はウェブサイト (<https://www.fpv.org.au/>) で知ることができる。



図2-1 Family Planning Victoria で使われている教材1 男女、年齢での性器の特徴が良く表れている



図2-2 Family Planning Victoria で使われている教材2 中央は出産したばかりの新生児も表現されている

4. まとめと今後の課題

オーストラリアにおける知的障害者スポーツと性教育の現状を述べてきた。まず、スポーツ関係で聴取したSIAは、ここ自体が選手の競技能力を高めるためのいわゆる「強化」部門ではなく、多くの知的障害者／児にスポーツを行うことができる機会を提供し（実際にはNFを紹介する。ただし、在学生なら知的障害の資格があることを審査して、資格が認められれば活動は学校が担当する）、その後どのような競技会に出場できる可能性があるのか（いわゆるpathway）を会員に示す役割をしている。そのために国際大会を主催しているINASの動向を注視して、必要な情報をNFに提供する。その他の活動はNFに任せているといえる。会員の情報は一元化されているので、会員にとっては他の競技に移るのも容易であり、NFにとっては必要な選手を発掘できるメリットがある。このような活動を14名で行っている。一方日本は、NF以外で知的障害者スポーツに専従している者は著者らが知る限り1名であり、他は有志によるボランティア活動に頼っているのが現状である。オーストラリアの活動は取り入れられるべき点が多いと考えられるが、その実施のためには専従者の増員かより多くのボランティアの参加が必要であろう。もう一つの聴取先であるFamily Planning Victoriaは、性に関する様々な問題の解決法を地域や学校に提供する目的で作られたもので、その守備範囲は、性教育から避妊薬の開発までと幅広い。その根底にある思想的なものは、少数者、弱者への尊重と尊敬である。このような機関もとても重要であり、特に知的障害者をも対象にしているのは是非我が国も参考にしてもらいたい点である。我が国でも女性アスリートのかかりやすい疾患として、低栄養、無月経、骨粗しょう症への認識が深まりつつあるが、これら3徴候が出現する前の、より若い世代が、アスリートであるか否か、あるいは男女を問わず、性の知識の一環として身につけられる仕組みができることを望む。

注

- 注1) INASは、知的障害者のための競技性の高いスポーツの団体であり、国際パラリンピック委員会のメンバーでもある。したがって、INAS主催の国際大会で好成績を収めたアスリートは、競技種目によってはパラリンピックの知的障害クラスに出場できる可能性がある。ウェブサイトは <https://inas.org/>。
- 注2) グローバルゲームスはINASが主催する主要競技のアスリートが一堂に会して行う国際競技大会で、4年に一度行われる知的障害者スポーツとしては最大規模の大会である。

引用文献

- 1) <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000191192.html>
- 2) 宮崎伸一 (2019) 知的障害者スポーツへの支援. 日本スポーツ精神医学会 (編), スポーツ精神医学改訂第2版 診断と治療社 東京 181-186
- 3) 宮崎伸一 (2009) 知的障害者スポーツへの支援. 日本スポーツ精神医学会 (編), スポーツ精神医学診断と治療社 東京 136-144
- 4) 斎藤利之, 宮崎伸一 (2015) 2020年パラリンピック東京大会に向けての知的障害者バスケットボールの現状と課題 スポーツ精神医学 12巻 25-30
- 5) 笹川スポーツ財団編 (2017) 諸外国における障害者のスポーツ環境に関する調査 [イギリス, カナダ, オーストラリア] 報告書
- 6) 児嶋芳郎・細渕富夫 (2011) 知的障害特別支援学校における性教育実践の現状と課題「全国実態調査の結果より」, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 10, 105-110
- 7) 斎藤利之, 宮崎伸一 (2014) 知的障害児の性教育指導における現状と課題 中央大学保健体育研究所紀要第32号 161-170

なお、本文中、注、および引用文献にあるウェブサイトは、2019年1月3日閲覧可能であった。